

平成26年度 国際関係論専攻 調査研究助成金  
調査・研究報告書

- 受給者： B1366012 村瀬里紗
- 所属： 上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻博士前期課程
- 研究課題： 社会運動団体の連携と分断－TMI と福島における脱原発運動のマイクロ・プロセス比較研究

■ 調査背景

本研究の研究関心は社会運動団体間の連携にある。これまで、1979年、アメリカにおけるスリーマイル原子力発電所事故と2011年、日本における福島第一原子力発電所事故の際に起きた、脱原発運動を比較し、運動の発展に必要な団体間の連携がどのようにして生まれるのかを個人の認識、記憶、感情の側面から調査してきた。スリーマイルと福島の運動の発生過程は似通っているにも関わらず、その後、二つのコミュニティは大きく異なる道を歩んだ。スリーマイルでは地元の活動団体間の連携が取られた。各団体の代表が集まり、情報共有を目的とした中間団体 Public Interest Resource Center (PIRC) が結成した。また、一貫した主張に基づき7年間にも及んで活動が継続された。それに対して福島では団体間の分断が進み、事故発生からわずか2年で各市民団体の存続が危ぶまれる状況に陥った。何がこの違いを生み出したのか。この疑問が「何故、そして、どのように運動団体間の連携もしくは分断が生まれるのか」という問いにつながった。

■ 調査目的

本研究の目的は個人の認識や感情、フレーム論、そして集合的アイデンティティに基づく3つの分析視点を統合的に用いることによって運動団体間の連携、もしくはその不在を生み出すマイクロ・プロセスを理解することである。1979年のスリーマイルと2011年の福島の地元住民による脱原発運動を観察分析することによって、以下の問いに答える：(1) いつ、どのようにして「個人的」認識、記憶、感情が共有され、「集合的」なものへと転換されるのか、(2) 「集合的」認識、記憶、感情はどのようにして運動団体間でのフレームの結びつきに影響するか、である。

■ 調査方法

本研究では、運動に参加する個人の認識、記憶、感情といった内的動機や集合的アイデ

ンティティの形成プロセスをより確実に把握するため、より多くの住民を対象に調査を進めた。例えば、福島で見られたように居住地の違いが感情や認識上の差異を生み出すことがある。より広い地域を対象にし、かつより多くの地元住民の心的プロセスをくまなく拾い上げることで、今まで以上にはっきりと感情や認識の差異やその原因、更には集合的アイデンティティ形成の契機などを把握することが出来る。

それらの目的を達成するため福島にて、調査票を用いた調査を進めた。スリーマイルでの原発事故の際、類似の調査票調査が Edward Walsh (1983)によって行われている。この Walsh 調査の調査票と申請者が行う調査票調査の結果を並べて分析することで、福島とスリーマイルをよりシステマティックに比較することが可能となる。調査票データの比較分析の後、社会運動団体の連携・非連携についてその要因とメカニズムを解析する作業を行った。

## ■ 調査日程

### 2014. 7. 22 - 7. 23 : 調査票作成

◇ 福島での調査に向けて、全国規模の質問紙調査を用いての市民社会組織の実態と機能に関する実証的研究をされている山形大学の山本英弘先生にご指導して頂き、調査票を作成した。この調査票は、米国スリーマイル原発事故時に Walsh 教授によって行われた住民調査項目を精読し、調査票を再現した。同時に、本研究の狙いである住民の認識や感情、集合的アイデンティティの形成、フレームの結びつきに関する情報を引き出すための調査項目を新しく作成し、調査票に付加することで調査票を完成させた。完成した調査票はパイロットリサーチにかけ、実査の前に不具合を修正した。

### 2014. 8. 20 -25 : 調査票調査の実施とデータ整理

◇ 調査対象者に直接、調査票調査の実施をお願いに伺った。また調査で得られたデータをクリーニングし、整理した。

## ■ 調査・研究報告（調査・研究によって何をどこまで明らかにしたか）

今回の調査票調査の結果、福島での運動では、「個人的」感情は「集合的」感情に変化しにくい傾向にあったことが分かった。スリーマイルでは原発事故直後に行われた町内会などの公の場で個人が原発事故に伴い発生した怒り、不安、恐怖などの感情を表現し、他者と共有することによって、個人間の一体感を醸成した。この一体感が運動団体間の連携を促進したと考えられる。それに対し、福島においては同様な集会有りながらも、「個人的」感情を共有する場として機能しなかった。